

ゲンビどこでも企画公募 2014 展 (審査結果・展覧会開催)

2014年11月1日(土)～24日(月・祝)

主催：広島市現代美術館

協力：オタフクソース株式会社、オリエンタルホテル広島、広島アンデルセン

入選 8 作品が決定！展覧会でご覧いただきます！

「ゲンビどこでも企画公募」は、広島市現代美術館のパブリックスペースを発表の機会を求めているアーティストに開放して開催するオープン・プログラムです。広く作品のアイデアを公募し、審査を経て入選した作品を展示します。

アーティストの意欲的な表現をサポートし、発表の場を提供するとともに、美術館という場の新しい魅力を発信することを目的としています。

第 8 回目の開催となった今年も多数の応募をいただき、特別審査員、広島市現代美術館館長等による審査の結果、8 点の入選作品を決定しました。

審査の重要なポイントは、美術館の様々なスペースの特徴を活かした作品で、空間と作品の魅力を互いに引き出しあっていること。展覧会をぜひご期待ください。

特別審査員賞 3 点を含む、計 8 点の入選作品

【応募総数】93 件

【入選】8 件 (特別審査員賞 3 件、地元協力企業賞 1 件含む)

※特別審査員：倉本美津留 (放送作家、ミュージシャン)、八谷和彦 (メディア・アーティスト、東京藝術大学准教授)、福住廉 (美術評論家)

【審査の流れ】美術館学芸員による一次審査を行った後、特別審査員等を交えて二次審査を行い、特別審査員賞等ならびに入選作品を決定。

※最新情報から企画詳細まで！特設サイトでご紹介しています。

<http://www.hiroshima-moca.jp/dokodemo/>

「観客賞」そして「授賞式」「地元協力企業の日」など、作品鑑賞だけにとどまらない楽しみ方があります

【展覧会 会期】2014年11月1日(土)～24日(月・祝)

【開館時間】10:00-17:00 ※入場は閉館 30 分前まで

【休館日】月曜日 ※ただし祝休日に当たる場合は開館し、翌平日休館

※観覧無料

<授賞式&スペシャルトーク①>

2014年11月1日(土) 14:00～授賞式、15:00～倉本美津留トーク「Let's アーホ！～芸術が世界をかえる！」

入選者への賞状及び金一封、地元協力企業からの副賞贈呈。授賞式終了後、特別審査員・倉本美津留によるスペシャルトークも開催します！※参加無料

<地元協力企業の日>

・2014年11月8日(土) / 広島アンデルセンの日 (石窯食パン)

・2014年11月9日(日) / オタフクソースの日 (広島お好み焼こだわりセット)

当日、観客賞に投票くださった方 (先着 50 名) にプレゼントをお渡しします。

<観客賞>

来場者による投票で入選作品の中から観客賞 (1 名/組) を決定します。

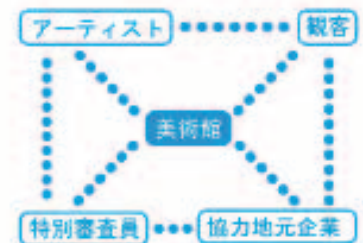
投票期間：11月1日(土)～16日(日)

※11月19日(火) 結果発表 (特設サイト)

<スペシャルトーク②>

2014年11月23日(日) 14:00～八谷和彦トーク「コンペと作家の関係」

特別審査員の八谷和彦と担当学芸員によるトークを開催します。※参加無料



- ・アーティストの育成
- ・美術館の新たな魅力を発見
- ・創造の場、交流の場をつくる

<地元協力企業の日>

当日観客賞へ投票した先着 50 名にプレゼント！

● 11月8日(土) / 広島アンデルセン

11月9日(日) / オタフクソースの日



(左) オタフクソース株式会社

「広島お好み焼こだわりセット」

(右) 広島アンデルセン

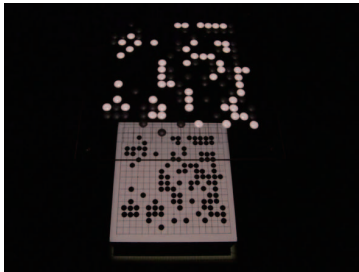
「石窯食パン」



【特別審査員賞（3作品）、地元協力企業賞（1作品）】

倉本美津留賞

うしお《原爆下の対局》



1978年山形県生まれ、東京都在住。1945年8月6日、広島市郊外において原爆の被害の中、行われていた第3期本因坊戦第2局(碁の対局)をテーマにした作品。この対局は、爆風の被害を受けた後、吹き飛ばされた碁石を並べ直し終局まで行われた。原爆投下寸前の局面を、碁石と盤面の影によって再現する。

福住廉賞

水口鉄人 (みずぐち・てつひと) 《Tape Painting》



1985年広島県生まれ、広島県在住。一見すると、剥がれかけた、または長期間にわたって貼られている粘着テープが貼りついているように見える白いキャンバス。実際は、作家が巧妙に描いた「絵画」であり、古い壁の一面を切り抜いたような作品は、白い壁面を異質なものと変化させる。

【入選（4作品）】

五十嵐純 (いがらし・じゅん) 《借景 - 月 - 》



1984年東京都生まれ、埼玉県在住。砂利によって月の表面を描いた作品。月と地球の関係性を真逆にし、通常では見上げる対象である月を見下ろし、また、月面に立って空を見上げることができるようにする。当館の建築の特徴を生かした空間作品。

長 雪恵 (おさ・ゆきえ) 《夢と現実を旅する物語》



1976年東京都生まれ、東京都在住。様々な動物や風景が色鉛筆、水彩、クレヨン等で描かれ、さらに上から彫りがほどこされたレリーフ作品。童画のような色使いや描かれている対象とは裏腹に、画面上をくまなく刻すことで動物や風景の境界線は曖昧になり、渾沌とした世界が広がる。

八谷和彦賞

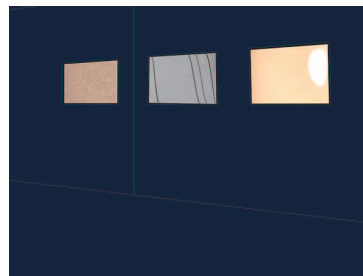
関川航平 (せきがわ・こうへい) 《風邪をひいて、なおす》



1990年生まれ。展示期間中、作家本人が美術館内にて風邪をひき、治すまでをパフォーマンスとして行う。風邪をひく、風邪を治すという極めて個人的な状態を、美術館という公共的な空間で公開することで、観客の抱く作品の概念を揺るがし、新たな鑑賞体験に誘う。

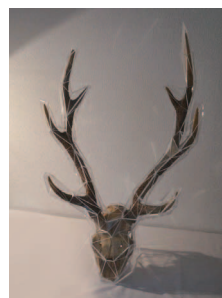
オリエンタルホテル広島賞

吉田理沙 (よしだ・りさ) 《viewing》



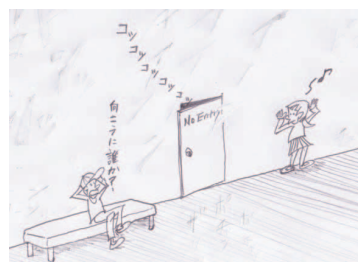
1985年東京都生まれ、神奈川県在住。送電線、電球の光、壁面をそれぞれアップで映した動画作品。部分を抽出し、単調な横線や円、格子模様として映し出されたそれらは、本来の機能から離れて、美しい幾何学模様として描き出される。

大村洋二郎 (おおむら・ようじろう) 《KAMISAMA MADE》



1978年滋賀県生まれ、広島県在住。自然物をアクリルで覆った彫刻作品。自身で形を作るのではなく、自然が作り出す形を人工物で覆うことによって、自然を幾何学的造形へと捉え直し、彫刻作品への転換を可視化する。

福永 敦 (ふくなが・あつし) 《ここではないどこか》



1980年広島県生まれ、ベルリン(ドイツ)在住。扉の向こうから聞こえてくる様々な音。話し声にも、動物の鳴き声のようにも聞こえるそれらは、全て人によって発せられたオノマトペ(擬音語)である。漏れ聞こえてくる声によって、見えない扉の向こう側にあるかもしれない別の世界の広がりや想像させる。

審査を終えて～特別審査員による審査講評

倉本美津留（くらもと・みつる）／放送作家、ミュージシャン

自分は芸術作品に対する評価の基準として自分のオリジナルの尺度『アーホ!』を用いる。『アーホ!』は、大阪の最上級の誉めことば『アホ』と『アート』を掛け合わせたもの。大阪人の、とんでもなく堪らないものと遭遇したときに感激と愛情を持って発する「アホやな〜〜」は、今までに体験したことのない感動を因らずも起こされたときに口をついて出てくる。

芸術の役割とはそういうものを意図的に生み出し、世の中に新しい感動の数を増やすことだと思っている。「わ!こんな表現があったんだ!」と見た者に、見る前と見た後で確実に感覚の変化をもたらす作品。そうであるかどうかを一番重視する。

今回も、その基準で審査し、いくつかの『アーホ!』に出会えてとても有意義だった。ヒグマを脱色してパンダにした小森崇の実行力に『アーホ!』を感じたし、実際の戦争体験の言葉を若者に覚えさせて自分のことのように話させる渡邊詩子の時空超えに『アーホ!』を感じた。環境音を徹底的にオノマトペに変換するという福永敦の執拗さにも『アーホ!』を感じたし、0円銀貨で貨幣価値に刺激を与えようとする長田恵吾の試みにも『アーホ!』を感じた。そんな中、広島というこの地に実際にあった重要な出来事をシンプル・イズ・ストロングに痛烈なメッセージとともに、既視感のない表現に至らせた、うしおの視点と発想とテクニックに今回一番の『アーホ!』を感じた。

八谷和彦（はちや・かずひこ）／メディア・アーティスト、東京藝術大学准教授

最近いくつか公募展の審査などをやらせていただいている、どの審査でも切実に悩みながら作品プランを採点をしていくのだが、今回は設定されている場所などが様々ということもあり、割と単純に「いち観客としてこの作品を見たいかどうか?」で決めるようにした。

基準をそう決めてしまえば案外審査はスムーズで、いくつかの作品には大いに興味を惹かれた。例えば、音を声に変換して館内を別の空間に変容させる福永敦の《ここではないどこか》、小石を使って光庭の中に月の庭を作る、五十嵐純の《借景-月-》、映像と彫刻とノイズライブによるパフォーマンス作品、飯島浩二《犬振るシッポ》、受付カウンターというどこの美術館にもかならずある設備をありえない高さに変更する、齋藤美沙《your information》など、「これはぜひ見たい!」と思う作品がいくつもあり、それらには高評価をつけた。

ただ、最終的に個人賞に推したのは、結局それとはやや異質の、関川航平《風邪をひいて、なおす》だった。意図的に風邪をひき、期間中ベッドを館内に持ち込み、作家がそこで寝てなおす、というプランは、ユニークではあるものの、おそらく実現は相当に困難な気もする。また実現したとしても、そこに展示されるのは本当に風邪をひいているのかすら定かではない、パジャマ姿の作家だけなのだw。だがしかし、今の自分は、無難に、普通に出来るものではない、ぎりぎりのものをこそ見たい、とも感じていて、そういう観点でこの作品を個人賞に選ぶことにした。

福住 廉（ふくずみ・れん）／美術評論家

応募作の全般的な傾向はとくに見当たりませんでした。あるのは、おもしろい作品か、そうでない作品か、それだけです。だから審査はきわめてスムーズに進行しました。

特別審査員賞もすぐに決定しました。水口鉄人くんの作品《テープ・ペインティング》は、一見すると「だまし絵」の手法によって美術館の制度を攪乱するノイズとして考えられますが、むしろ絵画の正統として評価するべき傑作だと思います。20世紀の絵画はイリュージョンを否定して平面性を追究してきましたが、やがて隘路に陥り、今世紀以後、イメージの再現性へと大きく旋回していきました。しかし、水口くんの作品は絵画の平面性の上でなお格闘しているように見えます。平面性を追究していけば、キャンバスと絵の具の厚みは限りなく薄くなり、結局はキャンバスと一体化するほかない。ではどうするのか。水口くんの答えは、キャンバスの平面性にガムテープという別の平面性を重ねるというものでした。キャンバスとガムテープはほとんど一体化していますが、あのガムテープのシワの厚みによって、私たちは逆説的に絵画の平面性を強く意識するのです。かつてフォントナはキャンバスに裂け目を入れて平面性の議論にとどめを刺しましたが、水口くんのガムテープはもしかしたらその裂け目を修繕しているのかもしれない。(後述略)



放送作家として、「ダウンタウンDX」、Eテレのこども番組「ジャッキー!」、「アートバラエティアホホ!」などを手がける。これまでの仕事に「ダウンタウンのゴッつぶええ感じ」、「M-1 グランプリ」、「伊東家の食卓」、「たけしの万物創世記」他。

★11月1日(土) 15:00～
スペシャルトーク開催!



Photo: 米倉裕貴

1966年4月18日(発明の日)生まれの発明系アーティスト。作品に《ポストベット》などのコミュニケーションツールや、ジェットエンジン付きスケートボード《エアボード》やメーヴェの実機を作ってみるプロジェクト《オープンスカイ》などがあり、作品は機能をもった装置であることが多い。

★11月23日(土) 14:00～
スペシャルトーク開催!



1975年生まれ。著書に『今日の限界芸術』、共著に『路上と観察をめぐる表現史』、『現代アートの本当の学び方』など多数。「artscape」、「共同通信」、「Forbs JAPAN」で毎月展評を連載しながら、美術誌や新聞、展覧会図録、作品集などに寄稿。展覧会の企画も手がける。